

専門学校進学者の入学経路と進学動機

鷲巣禎江（早稲田大学大学院）

1. 問題の設定

本研究は、高校卒業後の進路動向において大学に次ぐ比重を占めている専修学校専門課程(以下、専門学校)に注目し、そこで学ぶ生徒の入学経路と進学動機を明らかにしようとするものである。

専門学校に関する研究は、進学者の量的な規模の大きさに比して、これまで必ずしも十分な関心が注がれてきたわけではないが、高校生の専門学校への進学要因について、近年、進路多様校を中心に成績・進路意識・職業意識に着目した研究が行われている。だが、それらの研究には、進路選択をするうえで重要であると思われる親や友人、高校教員がどのように関わっているのかという分析が含まれていない。また、専門学校には多様な分野が 8 つあるが、それらをひとくくりにしてしまっているため、それら分野による違いが十分に分析されていない。

そこで本研究では、研究対象とする専門学校の分野を限定し、専門学校進学者がどのような入学経路をたどるのか、進路決定を行う際に親や友人、高校教員らはどのような関わりをするのか、最終的に選択した専門学校進学という進路に、かれらがどのような意味づけを行っているのかを明らかにしたい。

2. 調査対象と方法

進路選択の過程を詳細に析出するために、報告者が勤務する静岡県内にある商業実務分野 A 専門学校の 2011 年 4 月入学者全員、その保護者、高校教員を調査対象にした。調査の概要については表 1 に示す通りである。

表 1 「入学経路と進学動機に関する調査」

	調査対象		
	生徒 97 名 ⁱ	保護者 103 名 ⁱⁱ	高校教員 7 名
調査時期	2011 年 7 月～ 8 月	2012 年 2 月～ 5 月	2012 年 1 月～ 8 月
調査方法 ⁱⁱⁱ	半構造化面接 30～60 分/人	半構造化面接 30～90 分/組	半構造化面接 60～120 分/人
	質問紙調査		

3. 分析結果

生徒らが高校在学時、当初どのような進路を希望し、それを変化させ、最終的に進路をどのように決定したのか、以下の 4 点について分析を行った。

(1) 専門学校進学までの進路希望の変化

質問紙調査から、希望進路は就職、専門学校、大学、短大、未定に分けられた。まず、調査対象校の生徒らは、希望進路が一貫しているものが少ないという結果が得られた。高校 3 年間の希望進路の変化についてみると、就職希望は、1 年次(26.9%)から 2 年次(23.9%)と、わずかに減少しているが、3 年次になると激減(9.0%)している。また、未定層は 1 年次(28.4%)一番多かったが、カリキュラムの関係から 2 年次になると(13.4%)と半減している。一方、専門学校希望は、1 年次(1.5%)と最も少なく、2 年次(32.8%)、3 年次(71.6%)と拡大していく。

(2) 専門学校への希望変更要因

① 就職希望⇒専門学校

職業科出身の生徒の多くは、高校入学時から就職を希望していた。しかし、希望する企業に受験できるのは、高校内の成績等が相対的に高い者に限定されるため、実際に就職活動をする前に大半が就職を諦めていた。

②大学希望⇒専門学校

生徒の親は、自分の子どもが進学できる大学が卒業後に、はたして就職することができるのか、進学する価値がある大学であるか精査し、大学進学に否定的になっていた。また生徒は、「やりたいこと」以外の勉強も幅広くやらなくてはならない大学よりも、専門学校で興味ある分野に限定し、短期間で専門的に勉強をしたいとしていた。これは、西田(2009)の研究で述べられている「多面的な排他戦略『専門』性志向」と一致する。

③他分野専門学校希望⇒(商業実務)専門学校

「夢追い」型職業(荒川 2009)である声優・漫画家・芸人・音響スタッフなど他分野の専門学校を志望していた者は、親から卒業後の就職について不安があると反対され断念して、より現実的な専門学校に変更している。

(3)進路をめぐる親・友人・高校教員の関わりと葛藤

①親による進路の方向づけ

やりたいことがなく進路を決められない生徒の大半は、友人や高校教員に相談することができず、親が心配し声を掛けている。その際、親による進路の方向づけが行われているが、生徒らは男女ともに親からの介入を素直に受容している。また、親子間で進路のやりとりについての意識にはズレがある。

②進路をめぐる親と子どもの葛藤

子どもの進路について、親の思いが意識しないうちにダブルバインド(二重に拘束されている状況)的な対応になっていて、それが親と子どもの双方にとって葛藤となっている。

③進路をめぐる友人関係

就職希望者はお互いの状況を把握する必要があるため話し合う傾向があるが、専門学校希望者は、学校分野が多様であるため話しても分か

らないとし友人間で話し合うことをしていない。

④高校教員による進路指導の本音

荻谷他(1997)が指摘するように、学力選抜を行わない専門学校は、高校教員にとって、なんとか「押し込める」ことができる進路先という意識が強い。特に進路未決定者にその傾向が見られるが、就職を前提としない普通科進路多様校の教員は、専門学校での学びに期待をしていることが窺えた。

(4)選択した進路への意味づけ

生徒らの入学動機から進路の意味づけを分類してみると、以下の3つに分けられる。

①将来の夢実現

卒業後に就きたい仕事明確で、自発的に選択している者。しかし、その一方で就きたい仕事への強いこだわりが顕在化している。

②将来への保障

資格取得を将来への保障としている者。資格を取得しておけば就職や再就職に有利であるという親の介入を受容している者と、既卒者で将来への不安から資格取得を目指している者に分かれる。

③とりあえず進学

やりたいことが特になく、高校卒業後すぐに就職はしたくないから「とりあえず」進学をしている者。

最後に、親や生徒、高校教員側から見た専門学校の役割と位置づけを発表する。

(インタビューデータおよび参考文献の詳細は、当日資料として配布する。)

i 学科内訳：会計科 24 名、ビジネス科 39 名、医療事務 34 名(男 31、女 66)(新卒 76、既卒 21)

ii 「保護者対象就職個別面談会」にて担任とともに実施。内訳：父母 10 組、父のみ 6 名、母のみ 77 名、欠席 4 名

iii 調査協力者本人の了解を得た生徒および高校教員は、IC レコーダーに録音し、了解が得られなかった生徒および高校教員と保護者は、面接終了後メモを取り記録した。